〝児童における人間の探求〟を読んで

畠中徳子

この本は学生（お茶の水女子大学家政学部児童学科）のための児童学入門講座の講義・演習の一部を集録しまとめたものである。

しかしこれは、これから児童学を学ぶ学生だけではなく、現在、幼児・児童の教育に携っている人また保育者、教育者の養成の役割を担っている人々にとって、あらためて「児童学とは何か」を考え、学ぶことのできる書である。

著者はお茶の水女子大学児童学科の全教官と版画家の棟方志功氏である。本書では著者がそれぞれの専門領域において、児童学入門講座として独自の立場を明らかにしており、各篇が独立して一つのまとまりを持っている。にもかかわらず、読後、各著者に共通して感じられるものがある。それは「児童の見方・児童とのかかわり方」であり、「児童学を志す学生とのかかわり方」である。後者は、「大学のあり方」にもつながっており、大学の教官としての姿勢が示されている。

児童の見方・児童とのかかわり方

児童の見方に関しては、研究・実践にもとづく科学的認識（水野―医学からみた児童学、浅見―動物と人間・比較発達）が単に認識にとどまらず、医学からみた児童の幸福についての問題提起であり、動物の研究が、公害・環境汚染問題に対する人間のあり方に関連していることに気づく。そして児童の見方といっているものが、実はわれわれの児童とのかかわり方から生まれるものであることを知る。とくに、障害児と呼ばれている子どもに関して、われわれのうちにある意識的なあるいは無意識的な差別感が障害児をつくり出している状況（田口―子ども・さまざまな種類のレッテルをはられている子ども）については、現在幼児・児童の教育に携っている人への痛烈な告発ともいえる。では、どのような児童の見方が必要か。それは、人間の原点ともいうべき子どもの姿をとらえることであり、子どもと共にいて我々は生きているという自覚をもつことが大切になる。またわれわれ自身の体験にある子ども時代の心をふりかえってみるとき、子どもの外がわから捉えられない内面に気づくことができるという。ここにも子どもとかかわっている大人のひとつの姿勢がうかがわれる。（津守―子どもの見方）

また児童をとりまく文化状況（本田―児童の文化・創り手としての子ども）において、子どもがどのような役割を担ってきており、大人がそれに関してどのようにかかわってきたか。子どもといっしょによりよく生きてみようという著者の立場は、児童文化の創り手としての子どもの生活に充分な時間と空間を提供することが必要だという。これらの著者に共通してみられる子どもとの暖かいかかわり方は、子どもと共に進み、生きるという大人自身の生き方につながるからであるといえよう。

児童学を志す学生とのかかわり方

人間学としての児童学を学ぶ学生が、人間関係学的にかかわりながら児童学を学ぶ方法（黒田―人間関係・出会いを深める。松村―学び方・かかわり方）が示されていることがまた本書の特色である。児童の幸福を目指しているはずの研究が児童を手段的に、実験の道具に使う矛盾がまかり通っている今日、研究・実践のあり方および実践をとおした学習の方法が接在共存的であってはじめて、児童学が人間社会の永続的変革の実践科学になり得るのであろう。これは教師と学生との授業のすすめ方に具体化されている。

特別講義として版画家の棟方志功氏の話がのっているが、これは棟方氏が物や人にふれて「心」をとらえたエピソードである。話の内容は直接、児童の問題ではないが児童を学ぼうとする学生にとって、感動の体験がもたらすものの意義は大きい。保育者を養成する役割を担っている者にとっては、このような講師を招く企画そのものに学ぶものがある。

この教師と学生とのかかわり方は、「学生との出会い」にまで及んでおり、補説の部分には、この学科独自の入試問題「小論文」の内容、出題の意義及びそれをとらえた学生の感想、レポートがのっている。これらを通じて、われわれは「大学の在り方」を学ぶことができる。児童とあるいは学生とかかわっているわれわれが原点に立ちかえり、自らの生き方を問い直すことのできる書として類書を見ないのである。

（立教女学院短大）

・(1)＊田口恒夫　浅見千鶴子　光生館
　水野悌一　黒田淑子　昭和49年10月発行
　津守　真　松村康平
　本田和子　棟方志功ほか

(2)傍点は、著書からの引用の部分